

J・オースティンの『説得』に描かれる新しい女性像 —話法の分析をもとに—

210118 佐々木 ひいろ

序章

イギリスの女性作家ジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) の最後の作品である『説得』(*Persuasion*, 1817) は、婚期を逃した 27 歳の主人公アン・エリオットが、八年前に別れた恋人との再会により再び恋心を取り戻す物語である。上流階級家庭の末っ子として生まれたアンは、八年前に海軍士官である恋人のウェントワースと婚約をするも、彼が貧しく将来性を見込めないことを理由に周囲に説得され、関係を解消してしまった。八年の年月が経ち、アンは、海軍大佐に出世し地位も経済力も備えたウェントワースと再会する。二人は意識し合いつつも互いに距離を取りながら気持ちを強めていき、ウェントワースはアンに向けて二度目のプロポーズをする。

ジェイン・オースティンの作品は、作者が女性であること、主人公が全て女性であること、テーマが全て結婚であることなどにより、フェミニズム的観点で多く論じられてきた。『説得』では特に、主人公アンの冷静さ、鋭い判断力、理性的な思考が着目され、アンは出版当時における先進的な女性像を体現しているとされている。しかしそれと同時に、作品中にはアンの感情的な側面や非理性的な思考も描かれており、彼女の二面性が感じられる。アンの表面上の冷静な振る舞いと感情的な内面が相反していることは、先行研究で十分に指摘されておらず、彼女の人物像を分析するにあたって非常に重要な点であると考えられる。そこで、彼女の二面性のある人物像に着目し、フェミニズム的観点で考察することで、本作品に新しいフェミニズム的価値を見出すことができると考えられるのではないだろうか。本論文は、『説得』の主人公アンの人物像にあらわれる新しい女性像とは何かを提案することを主題とする。本論文における「新しい女性像」とは、作品が出版された周辺の時代 (18 世紀後半から 19 世紀前半) における一般的な女性像とは異なり、当時のジェンダー規範に則らない新しい側面を持った女性像を指すこととする。また、本論文の目的は、『説得』における主人公アンの心理描写をもとに、前述した相反する二つの性格のギャップを分析することで、先行研究では指摘されなかったアンの本質を明らかにすることとである。

研究方法としては、『説得』におけるフェミニズム批評の先行研究を用いた調査と、テキスト分析によりアンの人物像がどのように形成されているかを探る。英文学者の島崎 (2008) が述べるように、直接話法、間接話法、自由間接話法など、語りがどのような話法を選択して人物の思考や発言を抽出するかは、その人物の人物像の形成に影響を及ぼしているため、本論文では、話法を選択に着目しアンの人物像の分析を行う。

第 1 章では、『説得』をフェミニズムの観点から考察する。まず、作品が描かれた時代の女性たちが受ける男女不平等について取り上げ、アンが置かれていた状況や行動と比較をする。次に、ジェイン・オースティンが持つ女性の結婚に対する倫理観とそれに伴うジェン

ダー観について整理し、考察する。そして最後に、当作品に対してされているフェミニズム批評を整理し、この作品のフェミニズム的な要素を確認していく。

第 2 章では、当作品における話法の分析を行い、どのようにしてアンの人物像が形成されているかを検討する。まず、作品冒頭でのアンの控えめな人物像がどのようにして形成されているかを探る。そして次に、作品中盤部分における彼女の二面性のある人物像について考察する。最後に、作品終盤部分において浮かび上がるアンの本質について探る。

第 3 章では、『説得』で描かれる新しい女性像とは何かを、第 1 章と第 2 章の内容を踏まえて考察していく。まず、アンが周囲の人々と関わる中で発揮する彼女の冷静さについて整理する。次に、アンの冷静な振る舞いとは対極にある、彼女の揺れ動く感情について分析する。最後に、その感情を抑制する彼女の姿と、第 1 章で明らかにした当作品に含まれるフェミニズム的主張との関わりを論じる。

第1章 『説得』におけるフェミニズム的主張

本章では、人物像のテキスト分析との比較材料として、『説得』にはどのようなフェミニズム的主張が込められているのかを明らかにする。まず、当時の女性たちが経験したジェンダー間の不平等と女性として求められた性質を整理し、主人公アンの人物像と比較する。次に、ジェイン・オースティンの結婚に対する倫理観を確認する。最後に、『説得』に関して今までにされてきたフェミニズム批評についてまとめる。

第1節 『説得』が描かれた時代の女性たちとアン

本節では、女性たちに求められた性格や振る舞いを整理し、18世紀から19世紀の女性の社会的地位と『説得』の主人公アンの人物像との相関性を考察する。ここでは特に、家庭や教育、他者との関わりの中で求められた女性の性質に注目したい。

英文学者のウィリアムズ（2005）は、当時の女性たちの結婚について次のようにまとめている。当時、結婚における妻の地位の低さは権威によって保証されていた。1840年のある判決では、夫が妻を監禁する権利が認められ、程々に弁えればという条件のもと、殴ることさえも容認されたという。また、婚約によって女性は自分の財産を自由に使うことができなくなってしまうことに加え、夫は妻の財産全てを自分のものにすることができた。そして、1857年に制定された、離婚した夫婦の妻に自分の財産を自分で管理する権利を与えた婚姻事件法や、1870年の妻財産法、1882年以後の法律制定を通して、女性に自分の収入全部を確保することができる権利がようやく与えられた（ウィリアムズ, 2005）。以上のことから、女性の結婚における地位の低さは、法によって認められ、社会構造的な差別であったことが窺える。

ウィリアムズ（2005）の説明する当時の女性たちに求められた性質は、『説得』のアンによく当てはまる。女性は、男性のために快適な家庭づくりをすることが求められたという。アンも、未婚でありながら実家の家庭を円満にするために、娘として尽力している。例えば、妹のメアリーの理不尽なお願いに付き合っあげたり、姉のエリザベスと父親のサー・ウォルターのプライドを傷つけないように性悪なエリオット氏についての真実をわざと伝えないようにしたりするなど、愚かで惨めな家族でありながらも彼らをサポートし、満足のいく家庭づくりを心がけている。一方でこの研究者は、当時の小説では一般的に主人公である娘にとって第一の存在となるのが父親であると説明しているが、それはアンに当てはまらない。確かに、サー・ウォルターの贅沢により実家のケリンチ・ホールを出なくてはならなくなったり、彼のわがままにより生活が制限されたりすることはあったが、アンの精神的な拠り所はいつも、亡くなった母や、母の代理役であるラッセル夫人である。アンは父の意見に心の底から賛成を示したり、助言を求めたりすることなどはなかったが、ラッセル夫人の意見は必ず聞くようにしていた。彼女の価値観や倫理観、物事の考え方において、母親という存在が非常に大きいことは顕著に描かれていると言ってよいだろう。

イギリスの社会運動家であり、フェミニズムの先駆者であるメアリー・ウルストンクラー

フト(1759-1797)は著書『女性の権利の擁護』(1792)で、女性の地位向上を訴えており、この初版は、『説得』が書かれた25年ほど前に出版されている。彼女は第二章「女性の性格に関する通説を論じる」において女子教育の実情とそれに関する彼女の主張を論じている。まず、男子は紳士になるために学問を学ぶが、女子教育においては、知性を養うことは常に軽んじられているという当時の状況に対し、男女にとって必要性のある教育として、鋭敏な知的感覚を培い、興奮を抑え、肉体の成熟が完成する前に知性を養うことが提案されている。また、彼女は女子教育について、男性に依存するために表面的で意味のないことをしつけ、わざと子を愚かに育て上げる教育は不必要であり、その代わりに理知の習得を早めに行い、よく考える力を身につけることが重要であると主張した。こうすることで、男性が女性に対して支配的になることは無くなるだろうと説明されている。このようにウルストンクラフトは、女性の地位向上のために、女子教育の改善を主張している。

ここで、ウルストンクラフトが掲げる女性教育の理想を踏まえ、アンの人物像と比較したい。まず、理性の養成を重んじ、女性が男性に支配されることを批判したウルストンクラフトが理想とした女性像は、アンの人物像との共通点を持つ。作品内には、アンが理性をもって強い感情を制御するよう男性に諭している場面がある。ウェントワースの友人のベニック大佐とアンは読書を共通の趣味として持っており二人の仲は深まるのだが、そこで彼女は、“she ventured to hope he did not always read only poetry, and to say, that she thought it was the misfortune of poetry to be seldom safely enjoyed by those who enjoyed it completely; and that the strong feelings which alone could estimate it truly were the very feelings which ought to taste it but sparingly”(p. 118)と詩に溺れすぎず、控えめに楽しむべきだとベニック大佐を諭している。つまりアンは、男性であるベニック大佐に、感情に支配されず、理性によってそれをコントロールすることを提案しているのである。これは、理知を習得し、よく考える力を備え、男性に支配されない強さを持つ女性という点で、ウルストンクラフトが望んだ女性像ではないだろうか。

一方で、アンは、ウルストンクラフトの否定する表面的な従順な態度を持ち合わせている。修辞学者のWalzer(1995)が指摘するように、アンは、ウェントワースの形容のされ方と対照的に、弱い女性として描かれているといえる。二人は作中で、“He was...a remarkably fine young man of intelligence, spirit, brilliancy; Anne an extremely pretty girl with gentleness modesty, taste, and feeling”(p. 32)と紹介されており、ウェントワースの男性らしい勇敢さや決意と対照的に、アンの女性らしい繊細さと寛容さが感じられるという。アンは、父親や姉妹に対し、批判的な意見を持ちながらも決してそれを口に出すことはできなかった。また、八年前の婚約破棄についても、周囲に説得されこの決断に至ったものの、自分の中では八年間ずっと納得できないままでいた。このようにアンには、自分の正直な意見の表明を避け、周囲の人々の意思に従うという控えめさを持っているといえる。以上のことから、アンは、ウルストンクラフトの主張する望ましい教育と女性像に共通する点もあれば、彼女が否定する女性の弱さも持っているということがわかる。

第2節 ジェイン・オースティンの倫理

本節では、『説得』のストーリーやアンの人生においてジェイン・オースティンの倫理観がどのように反映されているのかを探るため、彼女が生前に残した手紙をもとに、彼女が持つ結婚に関する倫理観を分析していく。そして彼女のジェンダー観を探ると共に、本作品で示される結婚が、18世紀から19世紀の伝統的な価値観に基づいたものなのか、新しいものなのかを明らかにする。

ジェイン・オースティンが生前に残した書簡は、彼女の倫理観について探るための大きなヒントとなる。特筆すべきは、姪のファニー・ナイトに向けて書いたものである。彼女は恋人との結婚に悩み、オースティンに相談していた。ファニーの相手のプラムトリー氏の素養や人格は申し分ないもので、オースティンも彼に好印象を抱いていた。しかし、1814年11月18日の手紙（書簡109）で「あなたが彼のことを本当に好きではない限り、これ以上彼に言質を与えず、彼を受け入れることは考えないようにお願いしなければなりません。愛情がないのに結婚するくらいなら、何をしても、何に耐えてもよいでしょう」（p. 403）と助言している。ここから、オースティンは結婚における最大の条件は、相手の素養や地位、人格よりも、自らが相手に対して持つ愛情であると考えていることがわかる。また、同年11月30日の手紙（書簡114）では、以下のように述べている。

でも結婚が今よりもずっと先のことで、これから何が起こりうるかを考えると、「彼と結婚しなさい」とは言えません。あなた自身の気持がそれを望まない限り、あなたにとって、危険が大きすぎます。（中略）そしてあなたの人生でこれからの六、七年間がいかに誘惑に満ちているか（人生でもっとも強い愛情がめばえる時期なのですから）を考えると、今の冷めた気持で彼に自分を捧げることはしてほしくないのです。たしかに彼のような男性があなたをもっと惹きつけることができるならば、あなたにとってはその人が最も完璧な人物であるはずです。（p. 407）

この文章からもやはり、オースティンは愛情が結婚の最大条件であると考えていることがわかる。それに加え、愛情がないのであれば、今のチャンスを見逃し、次の機会をうかがうことを勧めている。このように、オースティンは、自らが愛情を十分に注げる人と結婚することを第一に考え、その人と出会うために若さを捨ててまでも待つべきだとしている。

英文学者の永嶋（1959）も同じくオースティンの書簡の分析をし、彼女が結婚に関して愛情が最も重要であると考えていることが、作品の倫理的背景に通じていると主張している。また、オースティンは金銭目的の結婚や若いうちに結婚した方が良いという風潮に流された結婚に大反対ではあったが、彼女の作品はヒロインが全てお金持ちの男性と結婚するという結末になっている点にも言及している。そこでこの研究者は、オースティンは決して結婚に経済的支配がつきまとうことを示唆したのではなく、どうすれば女性は幸福を掴め

るのかを描いたのであると主張している。オースティンは、1814年11月30日のファニー宛の手紙（書簡114）の中で、「このような暗黙の了解で、いつ結婚できるかわからない状態が続くのをおそれています。彼が独立するまで何年かかるかもしれません」（p. 409）と記している。このことから、彼女は結婚において愛情が全てなのだとただ強く信じ続けたのではなく、相手の経済的安定性も考慮していることから女性は弱い存在であることもまた理解していたと永嶋は解釈している。この視点は、『説得』のアンが愛情だけに流されずに経済的な事情を考慮してウェントワースのプロポーズを断ったことに重なっているという。

このように永嶋（1959）は、愛情が第一の条件であることと、経済的な事情を考慮し、女性としての弱さを補うことという、結婚においてオースティンが重要視する倫理観が『説得』に表れていると主張している。彼も述べる通り、オースティンは現実的に物事を捉え、人間の幸福とは何かをリアルに見つめている。英文学者の松本（2011）の言葉を借りれば、「ジェイン・オースティンは、愛の充足という個性の要求を主張するに十分なだけロマンティストでありながら、なおかつ社会的要請と人間の限界に対する認識とに背を向けることを肯んじないほどにリアリストであった」（p. 142）。『説得』のアンは、ウェントワースへの強い愛情を内に抱えながらも、父親であるサー・ウォルターや母の代理役であるラッセル夫人の決断に従い、自分の気持ちを押し殺した。最終的に愛するウェントワースと結婚をするが、それは海軍で成功し、経済力と安定した地位を手に入れた彼である。

女性の結婚において経済的な安定が見過ごされてはならないことは、作品内のさまざまな場面で描写されている。例えば、“an uncertain engagement, an engagement which may be long. To begin without knowing that at such a time there will be the means of marrying, I hold to be very unsafe and unwise, and what I think all parents should prevent as far as they can”(p. 268)というふうに、クロフト夫人は、長すぎる婚約期間や結婚を見込めるほどの収入のない不安定な婚約を否定し、そういうものは、親が全力で止めるべきだと発言している。そして、そこでウェントワースは、“Captain Wentworth’s pen ceased to move, his head was raised, pausing, listening”(p. 268)と何か刺さるものがあったかのように動きを止め聞き入る。ここでは、不安定な婚約を親が止めることの妥当性を理解し、八年前に周りの大人たちに説得されてプロポーズを断ったアンが正しい選択をしたことに気づく彼の姿が描写されている。英文学者のブラウン馬本（2011）は、アンがプロポーズを断った理由を客観的に捉えることや、彼女の理性的な決断を尊重できるようになることが、本作品におけるウェントワースが乗り越えなければならない困難であると論じている。こうしたウェントワースの心境の変化から、結婚において、将来の安定を見据えることの重要性が示されていることが解釈できるだろう。またアンは、“I was right in submitting to her, and that if I had done otherwise...I should have suffered in my conscience[...]a strong sense of duty is no bad part of a woman’s portion”(p. 286)と母親同然のラッセル夫人がアンの安全を考えてしてくれた説得に従ったことを正しかったと認め、

強い義務感を持つことが女性の優れた性質だと発言している。ここでも、経済的に安定した結婚を求める価値観が肯定されていると解釈できる。そしてアンは、“In marrying a man indifferent to me, all risk would have been incurred, and all duty violated”(p. 284)と愛情のない結婚を、危険で義務に背いたものであると真っ向から否定している。このアンの発言は、結婚において愛情が第一条件であるとしたオースティンの倫理観と同一であるといえる。これらのことから、愛情のある結婚と経済的な安定の両立が女性にとって賢明であることが作品の中で描かれているといえよう。愛情を第一条件としながら、経済力も条件の一つとして無視しないオースティンの倫理観は、アンを八年間苦しめたにも関わらず、最終的に幸福に導いている。

英文学者の Magee(1987) は、財力や社会階級を有するチャールズ・マスグローヴやエリオット氏との恋愛関係を避け、自らの価値を、愛情を以て認めてくれるウェントワースを選んだアンの結婚を、伝統的な価値観の否定の象徴であり、新しい社会環境へとアンを導いているとしている。確かに、経済的に安定した階級のチャールズを夫とした妹メアリーの結婚は愛情がなく愚かな物として描かれている点から、伝統的な価値観に則った結婚は作中で否定されているといえるだろう。よってオースティンの結婚において愛情を第一とする倫理観は、愛情のない、経済的な条件のみを頼りにした伝統的な結婚における価値観を否定し、女性が自らの感情に導かれて結婚相手を選ぶことができる新しい社会を提案するものであると考えられる。

第3節 『説得』に対するフェミニズム批評

本節では、『説得』にフェミニズム的主張が込められていることを確認し、この作品に新しい女性像が描かれていることを裏付けするため、当作品に対してされているフェミニズム批評の先行研究に対し、批判的検討を行う。

英文学者の池田(2021) は、アンが、女性が感情に支配されるのは女性の職業選択の自由が少ないことや十分な教育を受けられていないことなどの社会的要因による、と発言した場面をあげ、そうしたアンの考えは、メアリー・ウルストンクラフトの主張と一致すると述べている。アンはハーヴィル大佐との会話において、女性の活動領域が家庭のみに限定されているのと反対に男性が社会に出て活動できることを指摘し、男女の社会的な不平等について言及している。そして、ハーヴィル大佐は女性が心移りしやすいことをいくつかの本で読んだことを持ち出したが、アンはすぐにそれらの本は全て男性によって書かれ、男性の都合の良いように物語が語られてきたのだと反論し、教育程度の男女差を指摘している。こうしたアンの指摘は、前節で取り上げた、女性が不十分な女子教育により理性を習得できずに男性に依存することにつながっているとのウルストンクラフトの主張と類似しているといえるだろう。アンが当時の社会における男女不平等に対して批判的な見方をしていることが読み取れる。

英文学者の Brown(1973)は、アンとハーヴィル大佐の会話より、ハーヴィル大佐が男女

の身体的特徴と精神的特徴の相関性を言及した場面に着目し、当時の女性蔑視の考え方に
対するアンの否定的な姿勢が読み取れるとしている。当時、女性の柔らかな身体的特徴を優
しき、寛容さといった女性としての理想的な精神と結びつける議論があったというが、それ
と同様に、ハーヴィル大佐は男性の心移りについて男性は肉体的に強いいため精神的にも強
いということを発言し、男性の愛情の方が長続きすると言う。これに対しアンは、女性の方
が寿命が長いことから女性の愛の方が長続きすることをハーヴィル大佐同様の肉体的特徴
と精神的特徴を結びつける論法で反論する。この場面では、アンが、ハーヴィル大佐と同じ
論法で主張することで、その論法が無意味だということを暗示していることが解釈できる。
Brown の述べるように、アンが、当時の生物学的テーゼに否定的な見解を示していること
が描かれている。また、それは作品中におけるフェミニズム的な主張の一部であるともいえ
るだろう。このように『説得』の中で人間の感情が身体的特徴と比例しているという概念は、
アンによって否定されており、作品中に見受けられるフェミニズム的な主張であると考え
られる。

また **Brown**(1973)は、『説得』において教育、社会における男女不平等の主張があらわれ
ており、メアリー・ウルストンクラフトとの共通点があると論じている。ウルストンクラ
フトとの共通点について、この研究者は女子教育の不平等と男女関係における女性の依
存についての主張が重なっていることを挙げているが、特筆すべきはその主張の仕方に違
いが見られるということである。**Brown** は、先進的な考えを公表した故に多くの非難を被
ったウルストンクラフトと違い、オースティンは非難されたり是正されたりしないよう
に、彼女なりの静かなやり方で疑問を投げかけていると論じている。確かに、アンの主張は
相手への思いやりが必ず付随しており、ハーヴィル大佐との議論の終わり頃には、男性が経
験する生活の危険や苦しい労働や孤独などに対する労いの言葉を添えている。ベニック大
佐との会話においても、ただ論すだけではなく、どんな本を読めばよいかを彼に助言し、ア
ンの心づかいを示している。他の人物の感情を害すことなく、自らの主張をするアンの姿勢
は、**Brown** のいうオースティンの静かな主張と重なるといえる。

以上で整理したように、アンの発言からは、当時のジェンダー規範に疑問を呈する彼女の
姿勢が読み取れる。男女の社会的・教育的差別を認識し、男性に対してもそれを柔らかに、
そしてはっきりと主張できる彼女の人物像は、新しい女性像として描かれていると考えら
れ、フェミニズムの観点から考察する価値があるだろう。

本章では、『説得』に描かれるフェミニズム的な主張を分析した。はじめに 18 世紀から
19 世紀の女性に求められた性質を持つアンには、ウルストンクラフトの主張する新しい
女性像に重なる部分も見受けられ、社会的・教育的な男女間の不平等を男性に訴えかける場
面からフェミニズム的な主張が描かれていることを確認した。そして、オースティンは結婚
において愛情を最重要条件としながら、経済的な条件も考慮すべきであることを倫理観
として抱いており、それは『説得』に反映されていることがわかった。最後に、『説得』に
関するフェミニズム批評を整理し、アンの発言から当時の男女の社会的・教育的差別につい

ての主張があったことが確認できた。

第2章 話法によるアンの人物像の形成

本章では、アンの人物像を話法の分析をもとに探る。まず、作品冒頭部分におけるアンの控えめな印象がどのようにして与えられているかを明らかにする。次に、作品中盤部分においてアンの人物像が二面的になっていく流れを確認する。最後に、アンの自主的な印象が描写されている様子を分析する。

第1節 話法の選択によるアンの控えめな印象

本節では、読者に与えられるアンの第一印象について探るため、作品の第1章から第6章における話法の分析をする。特に、アンの控えめな印象がどのように形成されているか、また、主人公たる存在感がどのように強められていくのかを探る。

言語学者のリーチ&ショート（2003）は、語り手が登場人物の発話や思考を表出する方法を6つに分類しそれらの話法の効果を説明している。本論ではそのうちの直接話法、間接話法、自由間接話法による読者に与える効果を取り上げ、それらをもとに作品分析を行う。以下の三つの文章は、それぞれ（1）直接話法、（2）間接話法、（3）自由間接話法の例である。

- （1） He said, “I will be back tomorrow.”
- （2） He said that he would be back the following day.
- （3） He would be back the following day.

直接話法と間接話法における違いは、直接話法は、人物の発言または思考した内容をそのまま引用して語るのに対し、間接話法では、人物の発言または思考した内容を語り手の言葉で言い換えて語っている点である。直接話法では、人物の発言における語感をそのまま使用できる。そのため、例えば『説得』の登場人物であるクロフト提督の“Ay”という口癖は、直接話法によりそのまま抽出されることで彼の楽しげでフレンドリーな人物像が浮かび上がる。逆に言えば、間接話法によって語り手の言葉で人物の発言を語ることで、その人の人物像が浮かび上がりにくいと解釈できるだろう。そして、自由間接話法の典型的な特徴は、（3）で挙げた文章のように、“He said”などの伝達節が排除されているが、時制や代名詞の用法は間接話法の規則に則っていることである。この話法の効果としては、口語的な語彙や表現の選択など、より自由に人物の思考を表出することができる点で、登場人物が発話や思考において用いた言葉や表現の趣を味わうことができることが挙げられる。また、あくまで語りに統合される形で描かれるため、登場人物と読者の間に語り手が介在することになり、時に、語り手の立場から皮肉的な意味を発言内容や思考内容に投げかけることができると説明されている。

まず、物語冒頭部分のアンの存在感の薄さについて、語り手の叙述と直接話法の使用に着目し分析をする。島崎（2008）は、父親のサー・ウォルターや弁護士のシェパード氏の発話

は直接話法で多く抽出されることで、彼らの明確な意思が伝わっているのに対して、圧倒的に少ない直接話法によるアンの発言の描写は、アンの控えめな印象を前面に出していると指摘している。この研究者が説明するように、アンの地味な印象は話法の選択により意図的に与えられているといえるだろう。作品の第1章冒頭では、語り手の叙述的報告が続く。アンが初めて登場する文章は、長女のエリザベスが美人で父親から溺愛されていること、三女のメアリーがチャールズと結婚したことによりひとまずエリオット家としての身分的な体裁は整っていることの後に、“Anne, with an elegance of mind and sweetness of character, which must have placed her high with any people of real understanding, was nobody with either father or sister”(p. 9)と、アンが家族の中でいないに等しい存在として扱われていることが描写されている。ここでは、三人称の語りの叙述によりアンの家族の中での存在感の薄さが客観的で確実なものとして描かれるため、読者に与えるアンの控えめで地味な存在は強くなると考えられる。

またその後の第二章にて、アンは再登場する。そこでは、誰も気に留めていなかったアンにラッセル夫人が節約計画について相談するのだが、アンの描写はまたしても“Every emendation of Anne’s had been on the side of honesty against importance. She wanted more vigorous measures, a more complete reformation, a release from debt”(p. 16)というような叙述的報告により提案の内容が説明されるだけである。こうして彼女の発言が直接話法で抽出されないことで、発言における語感が失われ、アンがどれだけの強い意志や熱意を持って提案をしたのかは不明のままとなり、彼女の人物像が窺えるほどの臨場感は読者に与えられない。第3章では、“Here Anne spoke—navy I think, who have done so much for us, have at least an equal claim with any other set of men, for all the comforts and all the privileges which any home can give. Sailors work hard enough for their comforts, we must allow”(p. 24)と海軍の仕事ぶりや貢献を絶賛するアンの発言が直接話法で描写されるが、その後1ページという長文にわたるサー・ウォルターの反論によって存在がかき消されてしまう。上述のように、作品冒頭において、語り手の叙述と他の人物との直接話法による発言数の差により、アンの存在が読者の前で小さくなっていることが確認できる。

次に、作品第4章においてアンについての情報が次々と解禁されていく語りを分析する。第4章では、いまだに語り手の叙述が続くが、その内容はアンの恋愛事情についてであり、ついに自由間接話法によって抽出されるアンの思考が描写され、読者はアンの心理を如実に感じ取ることができるようになる。英語学者の橘高(2017)によれば、自由間接話法を用いることで、語り手の声と人物の声が重なって聞こえ、人物の内面における声がより鮮明に聞こえるという効果があるという。その効果は、以下の自由間接話法の文章において、アンの心の叫びや率直な価値観を生々しく伝えている。“How eloquent could Anne Elliot have been! how eloquent, at least, were her wishes on the side of early warm attachment, and a cheerful confidence in futurity against that over-anxious caution which seems to insult exertion and distrust Providence!”(p. 36)というアンの心の中の叫びには、アンが若者の暖

かい愛情や熱い自信を尊び、過剰な慎重さを否定する価値観が描かれている。この文章は、引用符なしに感嘆文が用いられている点、伝達節がない点から自由間接話法だと解釈することができる。また、ロマンスを肯定する立場や、分別を否定的、軽蔑的に捉える立場を“early warm attachment”や“over-anxious caution”という主観的な語句を用いて表しており、読者はアンの思考や価値観を如実に感じることができる。こうして、今まで読者の前で目立たなかったアンの内面がようやく前面に出され、読者が彼女に関心を寄せるように操作されていると解釈できる。

しかし、それ以外では語りの叙述が続き、第4章の最終文では、“she hoped that the acquittance between herself and the Crofts, which, with Lady Russel, still resident in Kellynch, and Mary fixed only three miles off, must be anticipated, need not involve any particular awkwardness”(p. 38)という間接話法の文で締めくくられる。このように第4章では、わずかにアンの内面が垣間見える描写を入れ込み読者の関心を維持させながらも、語り手の叙述や間接話法などの語り手を常駐させる話法によってアンの置かれた状況を客観的に描写し、この後の物語の理解に続けていると考えられる。

第5章、第6章は、アンとアップークロスに住む妹のメアリーやマスグローヴ家の人たちの関わりが描かれる。第5章ではアンの発言が直接話法により描写される回数は徐々に増え、アンの人物像をより詳細に理解する機会が読者に与えられると解釈できる。アンは姉のエリザベスに役に立たないと言われており、ケリンチ・ホールでの重要度は低いように印象付けられるが、妹のメアリーには頼りにされ、ふたりの会話は対等に行われる。直接話法で描かれるアンとメアリーの会話には、周りを思いやり、自分の考えを控えめに、簡潔に述べるアンの姿と、思いついたことを好きなだけ述べるメアリーの姿が描かれている。まず、メアリーの“So, you are come at last! I began to think I should never see you. I am so ill I can hardly speak. I have not seen a creature the whole morning!” (p. 45)という安堵の声から始まる。それに、“I am sorry to find you unwell” replied Anne. ‘You sent me such a good account of yourself on Thursday!’” (p. 45)とアンは返すが、メアリーは以下のように返答する。

Yes, I made the best of it; I always do; but I was very far from well at the time; and I do not think I ever was so ill in my life as I have been all this morning; very unfit to be left alone, I am sure. Suppose I were to be seized of a sudden in some dreadful way, and not able to ring the bell! So, Lady Russel would not get out. I do not think she has been in this house three times this summer. (p. 45) (下線筆者)

上記引用部分の下線部では、“I made...I always do...but I was...and I do not...”と短い節が続いている、彼女の話し方が直接話法により如実に描かれていることから、直感的に考えたことをそのまま口にだす短絡的な人物のイメージを読者に与えていることが読み取れる。

それとは対照的に、ここでのアンは、メアリーの愚痴に対する返答は簡潔に、主張するべきところは長く発話していることで、短絡的なメアリーとは対照的なアンの思慮深い人物像が浮き彫りになる。例えば、“though I told him how ill I was, not one of them have been near me[...]I suppose, and they never put themselves out of their way”(p. 46)と病気の自分のために来てくれる人が誰もいなかったことを長々と愚痴るメアリーの発言の直後に、“You will see them yet, perhaps, before the morning is gone. It is early”(p. 46)と短い文章で簡潔に答え、メアリーを手早くなだめる頼もしい姉としての姿が窺える。また、手紙では調子良さそうに書いていたメアリーが実際に会ってみると体調が悪いふりをしているのを見かねて“My dear Mary, recollect what a comfortable account you sent me of yourself! [...]you must be aware that my wish would be to remain with Lady Russel to the last”(p. 47)とメアリーを諭すアンの様子からは、彼女が周りをよく見て思いやり、ときには正論を相手に伝える人物であることがわかる。特に、相手への義務や強制を意味する“you must”という強い語感から姉としての責任感が感じられるとも解釈できるだろう。

しかし、第6章でアンの発言は再び少なくなる。アップークロスにおいて“One of the least agreeable circumstances of her residence there was her being treated with too much confidence by all parties, and being too much in the secret of the complaints of each house”(p. 53)とあるように、アンは信頼されすぎていることでみんなから愚痴を聞かされるのである。一つの物事についての愚痴を、メアリー、その義母マスグローヴ夫人と義姉妹のマスグローヴ姉妹から聞かされるアンの返答は省略されている。そして、孤独ながらも周りの声に耳を傾けようとする彼女の健気さが“She could not do little more than listen patiently, soften every grievance, and excuse each to other; give them all hints of the forbearance necessary between such near neighbors, and make those hints broadest which were meant for her sister’s benefit”(p. 55)と、語り手の叙述によって書かれている。このようにして、作品の第5章と第6章では、直接話法で描写されたアンとメアリーの会話によってアンの柔軟な性格はわずかに見受けられるも、アップークロスでのアンの発言の少なさが目立ち、アンの控えめな性格と彼女の存在感の薄さや主体性の弱さが読者に印象づけられていると解釈できる。

第2節 アンの激しい感情と冷静さ

本節では、作品中盤において彼女の感情的な一面が明らかになる過程と他人との関わりの中で冷静な振る舞いをする姿を話法の観点から分析し、これらから読者が形成するアンの人物像を考察する。

作品の第7章では、アンの元恋人のウェントワースが登場し、アンの動揺と彼に対する未練が徐々に明かされていく。アンは八年ぶりのウェントワースの姿をすぐ見ることはなく、先に彼と面会したマスグローヴ姉妹の感想によりその印象を聞かされる。彼女らの感想は、以下の文章で語られている。

as to give the information of Captain Wentworth's visit; staying five minutes behind their father and mother, to endeavour to express how perfectly delighted they were with him, how much handsomer, how infinitely more agreeable they thought him than any individual among their male acquaintance, who had been at all a favourite before. How glad they had been to hear papa invite him to stay dinner, how sorry when he said it was quite out of his power, and how glad again when he had promised in reply to papa and mamma's farther pressing invitations to come and dine with them on the morrow-actually on the morrow; and he had promised it in so pleasant a manner, as if he felt all the motive of their attention just as he ought. And in short, he had looked and said everything with such exquisite grace, that they could assure them all, their heads were both turned by him (pp. 64-65) (筆者下線)

上記場面では、自由間接話法の要素を含んだナレーションにより、マスグローヴ姉妹のウェントワースの全ての行動に感激した様子と浮ついた気持ちが、語り手の声を借りながら簡潔に示されている。引用の下線部は自由間接話法の特徴を持っていると考えられる部分であるが、“how perfectly delighted...how much handsomer...how infinitely more agreeable...”と間接疑問文が複数続いている描写や、“papa”、“mama”といった口語、“delighted”、“handsome”、“sorry”、“exquisite”などの主観的な形容詞を混ぜることで、マスグローヴ姉妹の語感やトーンが伝わり、彼女たちの高まった感情や熱のこもった発言が窺える。そして、上記引用部分の直後に“and off they ran, quite as full of glee as of love, and apparently more full of Captain Wentworth than of little Charles”(p. 65)と他の人物の返答を示さずに語りの叙述によってその場が締め括られる。ここでアンが何を感じて何を発言したのかは描写されることはないが、過去に愛した恋人の情報を八年ぶりに聞いて何も感じていないはずがなく、ここでは、アンの思考の描写が意図的に省略されていると考えられる。

その後アンは、ウェントワースとの面会を避けるためメアリーの息子のチャールズ坊やの世話を理由に、ディナーの参加を断る。アンはウェントワースに会わなくて済むことに関して満足しているが、それと同時に、彼に馳せる彼女の複雑な思いが自由間接話法を含む語りで以下のように描写される。

She would have liked to know how he felt as to a meeting. Perhaps indifferent, if indifference could exist under such circumstances. He must be either indifferent or unwilling. Had he wished ever to see her again, he need not have waited till this time; he would have done what she could not but believe that in his place she should have done long ago, when events had been early giving him the independence which alone had been wanting. (p. 69) (下線筆者)

上記引用下線部は、“Perhaps in different”と、もしかしたら無関心かもしれないと不安がるアンの心の声のように聞こえる表現や、推測の助動詞である“must”を用いて “He must be either indifferent or unwilling”とアンの主観的な推測を入れ込んでいる描写や、伝達節がないことでどこまでが語りの叙述でどこまでがアンの視点なのかが曖昧になっている点から自由間接話法であるといえる。このようにして、メアリーの夫チャールズの誘いを誠実に断ったアンが、実は込み入った感情を持っていたことへの皮肉を、人物の声に語り手の声を重ねる自由間接話法を用いて表現していると解釈できる。

第 8 章の食事会では、アンの発言が直接話法で抽出されることはなく、彼女はまた静かな聞き手となるのだが、それにもかかわらず、アンがウェントワースに対する熱い想いをいまだに抱えていることが描写されている。この食事会では、ウェントワース、クロフト夫妻、エリオット家やマスグローヴ家が集い、語りの叙述と間接話法による簡潔な説明と直接話法により、彼らの会話の全容が描写されている。ここでは、彼の発言や行動のたびにアンが何かを思う姿が語りの叙述で示されている。例えば、ウェントワースが海軍での死と隣り合わせの航海について語った直後、“Anne’s shudderings were to herself alone; but the Miss Musgroves could be as open as they were sincere, in their exclamations of pity and horror”(p. 78)という描写がある。この一文では、ウェントワースの恐ろしい話に密かに感情を入れ込み聞き入るアンの姿と同情と恐れを率直に叫ぶマスグローヴ姉妹の姿が、語りの叙述によって客観的に描写されている。二者の対比が明確に描かれ、アンがウェントワースのことを特別に意識していることが強調されていると考えられる。また、マスグローヴ夫妻の息子であり海軍の航海中に亡くなったディックの話になった際、ウェントワースの表情が一瞬曇るのだが、その場にいた人たちの中でアンだけがその表情の違いに気づく。彼女の心中は、以下のように語られる。

There was a momentary expression in Captain Wentworth’s face at this speech, a certain glance of his bright eye, and curl of his handsome mouth, which convinced Anne, that instead of sharing in Mrs Musgrove’s kind wishes, as to her son, he had probably been at some pains to get rid of him; but it was too transient an indulgence of self-amusement to be detected by any who understood him less than herself...(p. 79)

上記の文章は、“which convinced her”という伝達節があることから間接話法と考えられるも、“bright eye”、“handsome mouth”という主観的な語彙は、アンのウェントワースに対する密かな恋心を想起させ、やはりここでも彼女が特別な感情を抱いていることが描かれているといえる。

続く作品第 9 章、第 10 章では、自由間接話法によりアンの内面の激情が具体的に描かれ、

彼女の理性が恋愛によって強く揺れ動かされていることが描写されているといえる。例えば、第 9 章のアンがメアリーの息子のウォルター坊やに抱きつかれ困っているところを、ウェントワースに助けられる場面では、以下のように彼女の思考が自由間接話法を含む語りによって描写される。

Her sensations on the discovery made her perfectly speechless. She could not even thank him. She could only hang over little Charles, with most disordered feelings. His kindness in stepping forward to her relief, the manner, the silence in which it had passed, the little particulars of the circumstance, with the conviction soon forced on her by the noise he was studiously making with the child, that he meant to avoid hearing her thanks, and rather sought to testify that her conversation was the last of his wants, produced such a confusion of varying,... (p. 94) (下線筆者)

上記引用部分では、たかが子供を引き剥がしてもらっただけの出来事にかなり動揺するアンの姿が描写されている。英文学者の Page(1969)によれば、単語の羅列を含む自由間接話法は、登場人物の動揺を鮮明に描く効果があるという。下線部の自由間接話法と考えられる部分では、“His kindness...the manner, the silence...the little particulars...”と名詞句が羅列されていることで彼女の心中の動揺が如実に描かれている。またここでは、小説における「内的焦点化」という技術により、アンの内面の激動がより具体的に語られている。内的焦点化とは、文学理論家のジュネットが『物語のディスクール：方法論の試み』（1972）の中で定義したものである。これは、特定の人物のみに焦点を当て、その人物が知っていることや考えていることのみを語るというものである。英文学者の廣野（2017）は、『説得』では、アンの視線を制限することで内的焦点化が取り入れられていると説明しているが、本論でも彼女の解釈を踏襲し論じていく。“with the conviction soon forced on her by the noise he was studiously making with the child”の部分では、アンの視界がウォルター坊やのいたずらにより遮られている代わりに、彼女は聴覚を頼りにしていることがわかる。ウォルター坊やと騒ぐウェントワースの声のみを判断材料とし、彼は自分と話をするのを避けるためにわざとウォルター坊やとうるさくしているのだとするアンの推論は、語り手がその時のウェントワースの表情や行動などの情報を語らないことにより、客観的な根拠に乏しく信頼性がないように描かれていると考えられる。こうして上記の場面では、内的焦点化を用いてアンの外側の情報を省略することによって、アンの主観が鮮明に表面化されているといえるだろう。

そして続く第 10 章においても、アンの推論が自由間接話法により描かれている。ここではウェントワースがクロフト夫人に何か呟き、そこで夫人が、疲れていそうだから馬車に乗ったらどうかとアンに提案する。そこでアンは、“Yes; he had done it. She was in the carriage, and felt that he had placed her there, that his will and his hands had done it”(p.

106)と彼の優しさに感動し喜びを感じる。そして、“She understood him. He could not forgive her,[...]Though condemning her for the past, and considering it with high and unjust resentment, though perfectly careless of her, and though becoming attached to another, still he could not see her suffer”(p. 107)と、彼の単純な行動にも自らの深い推察を重ねている。ウェントワースがクロフト夫人に何か呟いた、というアンが見たものだけが描かれていることからここでも内的焦点化が用いられているといえる。アンの意識外のことについては語られないため、ウェントワースがクロフト夫人に何を呟いたのかをある程度推測はできても読者が明確に知ることはない。作品第 9 章の事例と同様に、アンがウェントワースに関する過剰な勘繰りを行なう様子が、自由間接話法と内的焦点化により効果的に描写され、これにより、恋愛で理性を失い、感情に揺さぶられるアンの人物像が読者の中で次々と形成されているのではないだろうか。

作品第 11 章では、自らの意見を主張する女性としてのアンの一面が描かれている。ここでは、航海中に最愛の妻を亡くしたベニック大佐と出会う。彼の悲しみは非常に大きいものであったが、文学が心の拠り所であり、それについてアンと深く話し合っていた。悲しみに暮れるベニック大佐に対し、アンは以下のように、詩に溺れすぎるのは良くない、と諭している。

...she ventured to hope he did not always read only poetry, and to say, that she thought it was the misfortune of poetry to be seldom safely enjoyed by those who enjoyed it completely; and that the strong feelings which alone could estimate it truly were the very feelings which ought to taste it but sparingly. (p. 118)

上記引用部分は、彼女の強い主張にもかかわらず、“she ventured to hope”や“she thought”と伝達節がある通り、直接話法ではなく間接話法で抽出される。語り手の介在によって、彼女が発言した際のリアルな語調が失われ、一見彼女の主張が弱められているように受け取れることもできる。しかし、これについて語り手が重視したのは、アンが選んだ語彙や主張の強さではなく、主張の内容と彼女がベニック大佐を思いやる態度であると解釈できる。実際に、このベニック大佐に対する否定的とも取れる彼女の主張を聞いた後の彼は、“Captain Benwick listened attentively, and seemed grateful for the interest implied”(p. 119)とむしろ感謝しているようである。アンが、韻文の代わりに散文を多く読むことを勧めたこと、おすすめの本、書簡集、伝記などを伝えたことは語り手によって簡潔に語られるも、アンが真剣に相手に向き合って丁寧に説明したことは、前述のベニック大佐の態度から判断して明確である。ここで読者がアンの主張の仕方を直接話法の描写を以てリアルに感じることは叶わなかったものの、間接話法による簡潔な内容の説明とベニック大佐の様子からアンの優しさのこもった丁寧な主張が描かれ、物語冒頭部分で形成されたアンの控えめな人物像と一致しながらも自らの意見を主張する芯のある女性としての一面が見られると解釈で

きる。

そして次の第 12 章では、義妹のルイーザの転倒事故が発生し、アンは冷静さと鋭い判断力を発揮し、読者が彼女に抱く人物像が一変する。ここでのアンの発言は、すべて直接話法で抽出され、“Go to him, go to him,’ cried Anne, ‘for heaven’s sake go to him. I can support her myself. Leave me, and go to him. Rub her hands, rub her temples; here are salts; take them, take them””(p. 129)と命令文で、簡潔に指示するアンの姿が如実に描写される。また、アンがそこにいる全ての人に気を配り行動している様子は、“Anne, attending with all the strength and zeal, and thought, which instinct supplied, to Henrietta, still tried, at intervals, to suggest comfort to the others, tried to quiet Mary, to animate Charles, to assuage the feelings of Captain Wentworth. Both seemed to look to her for directions”(p. 130)という語りの叙述で示されている。ここでは直接話法による登場人物の素早い会話と語りの叙述で説明されるアンの俊敏な行動力と判断力が明確に描写され、アンは冷静で鋭敏な人物であることが読者に提示されている。

作品第 7 章から第 10 章にかけて形成されたアンの激しい感情に左右される人物像と第 11 章、第 12 章で提示されたアンの自己主張する姿と鋭い判断力を持つ姿は一見相反しているように捉えられるが、第 15 章、第 16 章で読者は彼女の人物像の二面性を確認することになるといえる。ここでアンはエリオット氏に出会い、彼が彼女に好意を抱いている様子が描写される。アンはエリオット氏の態度を“she could compare them in excellence to only one person’s manners. They were not the same, but they were, perhaps, equally good”(p. 165)と名指しはされていなくとも恐らくウェントワースであろうただひとりの人物と重ねており、エリオット氏に好印象を抱いていることがわかる。しかし、アンはエリオット氏と話す際、エリオット氏の社会的地位に固執した考えに否定的な立場を示している。“My idea of good company, Mr Elliot, is the company of clever, well-informed people, who have a great deal of conversation; that is what I call good company”(p. 174)とアンの発言が直接話法で明確に描かれており、“that is what I call good company”と自分の主張を最後に強調していることから、彼女にとってこの発言が強い発言だったと解釈できる。ここでは、エリオット氏に対してアンが好印象を持っているのにも関わらず、それに左右されずに自分の信念を突き通すアンの姿が描かれているといえる。そして、ウェントワースに対する激しい想いと比べれば小さな好感に過ぎないものの、エリオット氏に対する感情を切り離し、自分の主張をするアンの姿は、彼女が揺れ動く心情を持ちながらもそれを表に出さずに冷静に振る舞うことができるという彼女の二面的な性格を読者に予感させるのではないだろうか。

第 3 節 アンの自主的な姿

前節では、作品中盤部分のアンの人物像における二面性が顕わになる過程を話法の分析により明らかにした。本節では、作品終盤において、アンの人物像が自主的な女性へと変容

していく過程を分析する。

作品中盤部分と同様、作品終盤においてもアンの激しい感情の揺さぶりが描かれることには変わらない。第 19 章にて、ベニック大佐とルイーザの結婚の噂を聞いてウェントワースが今どのような心情なのか気になっているアンは、ルイーザの転倒事故後、六週間ぶりにウェントワースの姿を見て、“she instantly felt that she was the greatest simpleton in the world, the most unaccountable and absurd!”(p. 202)と動揺する。この文章は“she instantly felt”と伝達節が用いられ間接話法の特徴を持ちながらも、“the greatest simpleton”、“absurd”といった主観的な語彙で自己評価する描写や感嘆符などから、アン自身の声も含まれているように感じられ、自由間接話法の特徴を持つともいえる。また、なぜか落ち着きのないウェントワースが、失恋に苦しんでいるのか、そうではないのかを考えることしかできないアンは、“She hoped to be wise and reasonable in time; but alas! alas! she must confess to herself that she was not wise yet”(p. 207)と自分が理性的でないことを責める。これらのように、作品終盤部分においても、彼女の感情的な一面は変容することなく自由間接話法を含む語りによって描写されている。

一方で、彼女の感情の高ぶりは、ウェントワースに自分の気持ちを伝えるために自主的に行動する彼女のエネルギーとなっており、肯定的に描かれているといえるだろう。第 20 章におけるバースの音楽会にてウェントワースと楽しい会話をしたアンは、“She was in good humour with all. She had received ideas which disposed her to be courteous and kind to all, and to pity every one, as being less happy than herself”(p. 215)と大きな幸せを感じていた。また、ウェントワースの態度の変化を彼の愛情が自分に戻ったのだと自信を持つアンの思考が“*Yes, some share of the tenderness of the past.[...]He must love her*”(p. 216)と自由間接話法で描写される。伝達節が省かれている点、“Yes”という彼女の確信を示す語、“must”といった個人の推量を表す語から自由間接話法であると判断でき、読者は彼女が自身の推測に自信を持ち、希望に満ちている様子を鮮明に感じ取ることができる。また、アンがエリオット氏と話しているところを見たウェントワースがむすっとした表情をしているのを感じ取った彼女は、“Jealousy of Mr Elliot! It was the only intelligible motive. Captain Wentworth jealous of her affection! [...]But, alas! there were very different thoughts to succeed. How was such jealousy to be quieted? How was the truth to reach him?”(p. 222)と彼がエリオット氏に嫉妬しているのだと解釈する。これらのような彼女の推論は、前節でも説明した通り、ウェントワースに関する客観的な情報が十分でなく、正当性に疑念が生まれてしまう。しかし、そういった理性に欠けた激しい愛情が結果的に“her affection would be his for ever. Their union, she believed, could not divide her more from other men, than their final separation”(p. 223)と彼女の強固な愛に導いているのだろう。

第 22 章、第 23 章では、自信とともに強固になった愛情をウェントワースに伝えるために自主的に行動するアンの姿が、直接話法と声の描写によって効果的に描かれている。英文学者の久守 (1998) は、オースティンは自己と他者の境界線は、声が届く範囲であると規定

しており、『説得』において声と身体距離の描写に留意したと説明している。カムデンブレイスで行われるエリオット氏が出席するイヴニング・パーティーに行くか、芝居見物に行くかで言い争いになるメアリーとチャールズを前に、自分は気にしないということを皆の前で発言するアンは、声と身体距離の描写の顕著な例といえるだろう。その発言をした後のアン様子は“*She had spoken it; but she trembled when it was done, conscious that her words were listened to, and daring not even to try to observe their effect*”(p. 261)と、体が震え、発言が聞かれていることを意識しているとあるように仰々しく描写されている。この聞かれている相手とは、ウェントワースのことであり、エリオット氏との関係の優先度がアンにとって低いことをほのめかす発言だったのだろう。ここで、アンはウェントワースに向けて間接的にこの言葉を放ち、ウェントワースはアンからのこの言葉をじっと聞く。こうしてアン発言に関してわざとらしい描写を付け足すことで、その発言が二人だけのものとなり、二人の距離が縮む印象を与えているのだと解釈ができる。

そして、続く第23章においても声の描写によってアンが自主的に発言や行動をする姿が描かれている。アンはハーヴィル大佐と男女の愛情の長続きの仕方について議論する。久守(1998)によれば、声を落として話すアンとそれをなんとか聞き取ろうとするウェントワースの身体距離は徐々に縮まっているという。アンは、“*We certainly do not forget you as soon as you forget us*”(p. 270)と女性愛する相手のことを男性のようにすぐには忘れることはできないと主張する。二人の会話が聞こえるほどの位置にいたウェントワースはうつかりペンを落とし、二人に存在を気付かれてしまうが、二人は声を落しながら議論を進める。そして彼女は、“*All the privilege I claim for my own sex...is that of loving longest, when existence or when hope is gone*”(p. 273)と女性希望が失われても愛し続けると発言し、ウェントワースへの愛の告白を間接的にしている。このようにして、直接話法と声の描写によって自主的に行動するアンが最終的に描かれていると解釈できる。

本章では、『説得』におけるアン的人物像の変容を話法の分析により明らかにした。まず、作品冒頭部分では、直接話法によるアン発言を少なくすることで彼女の控えめな印象が強調されるように語られていることが確認できた。そして、作品中盤部分では、冷静な一面が間接話法や直接話法で、感情的な一面が自由間接話法を含む語りで描かれ、彼女の人物像に二面性があることが明らかになった。最後に、作品終盤部分では、感情的な一面が引き続き自由間接話法を含む語りで描かれるも、直接話法によるアン発言で彼女の意志の強さが前面に出されていることから、アンが自身の激しい感情をエネルギーに、勇気を出して行動に移す姿が描かれていると論じた。

第3章 アンの人物像

前章では、アンの人物像の形成と語りの操作の関係性を、話法の観点から分析した。本章では、前章で明らかにしたアンの冷静な人物像と感情的な人物像の二面性について考察する。また、第1章で明らかにした『説得』のフェミニズム的側面と当作品で描かれるアンの人物像との関連性を解明する。

第1節 アンの冷静さ

前章で確認した通り、アンには冷静な一面と感情的な一面がある。この相反する二つの性質を分析することは、『説得』で描かれるアンの人物像を考察する上で重要だと考えられる。そのため、本節では、アンの冷静な一面が描写されている部分に着目し、本論第2章で行った話法の分析を参考にしながら考察をする。

英文学者の門田（2015）が指摘するように、アンの思慮深さや落ち着き、冷静な判断力は、周りの人たちとの比較により顕著に描かれている。例えば、彼によれば、ケリンチ・ホールやアップークロスに馴染まないアンは、虚飾にまみれたエリオット家や互いに陰口を言い合うマスグローヴ家の愚かさに対比的に描かれている。確かに前章で確認した通り、作品冒頭部分においてアンがエリオット家やマスグローヴ家と関わるときの発言はあまり描写されていないため、アンが彼らの愚かな議論に参加せず、どちらのコミュニティにも属していないように描かれている。また、彼女の発言は少ないながらも全て正論であることから、アンの冷静さや賢さは、ケリンチ・ホールやアップークロスの人々の愚鈍ぶりと対照的に描くことで強調されているといえる。

イギリスの女性作家の研究者である直野（1986）は、アンを完成された女性と認め、彼女の深い洞察力と冷静な判断力を評価している。アンは、八年間の失恋を通して人間を深く理解するようになった。今回の再会では、そうして得た精神的な成長により、八年越しの愛を成就させるだけでなく、強固なものにしたという。作品中のアンの多くの振る舞いから、彼女が深い洞察力を持つ人間であるという直野の見解は的を射ているといえる。例えば、特にアンの洞察力が発揮され功を奏することになる出来事として、エリオット氏の性悪を見抜いたことが挙げられる。エリオット氏は冷静で理知のある人物であるが、あまりにも周りからの評判が良すぎることにアンは不信感を持ち、その判断はスミス夫人の暴露によって正しいことが証明される。アンがいつも頼りにしている母親代わりのラッセル夫人でさえもエリオット氏に特別な評価を与えているが、アンのほうが人間を観察し正しく評価することに関して優れていることが示されている。

また、アンの冷静な判断力を論じる上で最も重要な事項として、ルイーザの転倒事故でのアンの振る舞いが評価できるだろう。アンは、ルイーザの転倒により気を失った義妹のヘンリエッタの世話をしながら、錯乱状態に陥るメアリーを介抱するチャールズを励まし、町をよく知るベニック大佐に医者を呼ぶよう指示し、ウェントワースを落ち着かせる。こうして、みんなに気を利かせながら、この状況を打破するための指示を的確に出し、ほとんどひとり

で対応する。ウェントワースは、作品第 23 章でのアンとの会話でこの事件におけるアンを“the steadiness of principle”(p. 281)、“resolution of a collected mind”(p. 281)と高く評価している。

また直野は、アンの冷静な判断力があらわれる例として、ウェントワースがルイーザまたはヘンリエッタに恋愛感情を抱いているのかをアンが推察した場面を挙げている。しかしこの点に関して、本論では否定的な見解を示したい。本論第 2 章で示した通り、アンがウェントワースに関して推察をする際、自由間接話法の使用によりアンの視点のみからその説明がされ、語りの叙述や直接話法など客観的な証拠となるものは描かれていない。そのため、その推察の説明にはアンの主観のみが入り込み、読者が不信感を覚えるようになると考えられる。アンの推察が正しいにせよ誤っているにせよ、話法の操作により読者がアンの推察に疑念を抱くよう仕組まれていることから、当作品において、冷静な判断力がアンの持つ性質として前面に出されているとは言い難い。

以上のことを踏まえて、アンの冷静さについてまとめていく。アンは、冷静さや賢さを、周りの人たちとの関わりを通して発揮していると考えられる。アンは自己よりも他人を優先して行動する人物である。それは、八年前にウェントワースのプロポーズを断った際、アンが自分の強い気持ちを抑えてまで、彼に対する思いやりと母親同然のラッセル夫人への義務感により婚約解消を申し出たことや、ケリンチ・ホールでしなければならない仕事を差し置いてまでわがままなメアリーの世話をしあげていることなどからも明白である。そしてその利他的な姿勢は、常に周りを配慮する力や、人間を観察する力を養い、ルイーザの転倒事故においてみんなを助けたことやエリオット氏の性悪を見抜いたことに活きたと考えられる。一方で、ウェントワースに関する推察の描写には、冷静さや理性を欠いた判断をしているのではないかと読者に思わせる語りの仕掛けがなされており、アンが完全なる冷静な人物であることが、本作品において描かれているとは言い難い。

第 2 節 アンの感情の揺さぶり

前節では、冷静さという観点からアンの人物像を分析したが、本節では、相反する感情的な一面を分析し、彼女の曖昧な性格について考察する。アンが感情に支配される様子や非理性的な描写がされる場面に着目し、彼女の人物像の二面性を明らかにしたい。

英文学者の川口（1997）は、『説得』には「分別」と「ロマンス」という二つの対立する価値観が共に存在していると指摘している（p. 94）。彼は、作品における分別のことをラッセル夫人やサー・ウォルターが支持する伝統的価値観のこととしている。また、ロマンスのことを、ウェントワースのような個人の働きによって財産を得ようとする新しい階級が支持する、感情や積極性を重視する価値観であるとそれぞれ定義しており、この二つが共存することにより作品に曖昧さやもどかしさを生み出していると指摘している。前節で確認した通り、アンが持つ冷静さは完全なるものではなく、場合によっては感情に支配される場合もあることを考えると、彼のこの指摘は妥当だといえる。やはりアンは、成長し落ち着いた

女性という単純な人物像に留まらないということがいえるだろう。

アンの感情の揺さぶりが見られる場面として四点挙げられる。一点目として、作品第9章にて、アンの体に覆い被さったウォルター坊やをウェントワースが引き剥がした場面が挙げられる。本論第2章で示した通り、ここでは、単に子供を引き離してもらっただけのことに対して、“such a confusion of varying”(p. 94)、“very painful agitation”(p. 94)と彼女の感情が乱れている様子が見られ、その後のウェントワースの行動について勝手に推論を立てる描写がされている。二点目として、第10章の散歩にてアンがルイーザとウェントワースの会話を二人の見えないところから聞いていた場面が挙げられる。そこでは、“Her own emotions still kept her fixed”(p. 104)と体を固まらせるほど動揺している。三点目として、アンがクロフト夫人に馬車に乗せてもらった場面が挙げられる。アンを馬車に乗せるようにとウェントワースが夫人に提案したのだと判断したアンは、“Yes, he had done it.[...]his will and his hands had done it”(p. 106)と激しく心を揺らし、彼が自身のことを心から嫌っているわけではないのだと考える。四点目は、作品第20章の音楽会にてウェントワースと会話をした時の場面である。その会話の内容と彼の態度や言動から“He must love her”(p. 216)とアンは判断し、“These were the thoughts..., which occupied and flurried her too much to leave her any power of observation”(p. 216)と感情の高まりにより周りが見えなくなっている。

上述の四点に共通しているのは、アンは、ウェントワースの存在を条件に感情を激しく揺らしているということと、彼に対する推察において客観的な情報が描写されず、身勝手な推論かのように描写されていることである。前節で説明したアンの冷静さと照らし合わせてみると、人の生死に関わる事件が起きても冷静に行動できるのにも関わらず、想いを馳せる人物に小さな子供のいたずらから助けてもらっただけで感情が過度に揺さぶられたり、感情に支配された結果、非理性的な推論をしているかのような印象を与えたりするという、矛盾した側面を持つ彼女の人物像が描かれていることがわかる。

では、なぜこのような曖昧な人物像が描かれているのだろうか。まず、アンが感情に溢れた人物として描かれていることについて、オースティンが愛情を結婚の最大条件としていたことが理由の一つだと考えられる。オースティンが愛情によって導かれる結婚を重視していたことから、恋愛感情を細かに描写することに大きな価値が認められていたことが推測される。本論第2章でも示した通り、作品冒頭部分では影の薄かったアンであるが、話法の操作により読者の注意が徐々に彼女の内面に向けられるように描写され、感情的な一面が次々と明らかになる。こうしたことから、アンの感情の描写が特に意識されていたといえるだろう。

そして、感情を揺さぶられながらも、冷静に行動しようと努めるアンの人物像が描かれた理由には、オースティンの結婚における倫理観のあり方があげられる。本論第1章第2節で示した通り、彼女の倫理観における幸せな結婚は、愛情という理屈では割り切れないものと経済的状況という現実的な問題を条件に成り立つものである。このロマンスとリアリズム

ムが並行するオースティンの倫理観は、アンの人物像において、恋愛で感情が激しく動かされてしまう点と周りとの関わりの中で冷静に行動できる点が共存していることと類似している。オースティンの倫理観はアンの二面的な人物像にも反映されており、愛に激しく心を揺さぶられながらも冷静に賢く行動することを忘れない女性像が描かれていると解釈できるだろう。

第3節 感情の抑制

本節では、前節で行ったアンの感情的な一面の分析をもとに、彼女がその感情をどのようにコントロールしているかを考察する。そして、彼女が感情を抑制する姿と本論第1章で確認したフェミニズム的主張を比較しながら、『説得』において描かれる当時の一般的な女性たちに必要な性質を明らかにする。

まず、前節で取り上げたアンの感情の高まりが描写されている四箇所場面において、彼女がその感情をどのように処理しているのかを分析する。一点目は、アンがウォルター坊やのいたずらからウェントワースに助けてもらい、感情を乱した場面である。彼女は動揺からしばらくは何をすればいいかわからなかったが、メアリーとマスグローヴ姉妹が部屋に入ってきたことで、“make over her little patient to their cares, and leave the room”(p. 95)とチャールズ坊やの子守りの引き継ぎを着実にやり部屋を去る。そしてその後、“it required a long application of solitude and reflection to recover her”(p. 95)とひとりになり内省をする。ここでは、自分の感情が揺さぶられていることを誰にも感じ取られないように席を外し、“solitude”を得て、自分自身の力で気持ちを落ち着かせようとするアンの姿が読み取れる。

二点目は、アンがルイーザとウェントワースの会話を茂みに隠れながら盗み聞きする場面である。一点目の場面と同様に、そこでも彼女は体が固まりしばらく動くことはできなかった。そして、“She had much to recover from, before she could move.[...]As soon as she could, she went after Mary”(p. 104)とあり、誰にも見られていない状態である程度自分の気持ちを落ち着かせてからメアリーの元へ向かったのだろうと推測がつく。その後、“Her spirits wanted the solitude and silence which only numbers could give”(p. 104)とあり、ここでもまた“solitude”が彼女の気持ちを落ち着かせるために必要なものであることを明記している。

三点目は、クロフト夫人に馬車に乗せてもらった場面である。そこでアンは、ウェントワースが彼女の疲れに配慮して夫人にアンを馬車へ乗せるよう提案したのではないかと推測して舞い上がる。その後アンは馬車に乗せてもらうのだが、そこにはウェントワースやクロフト夫妻も同席しているために孤独を得ることができず、夫人の気遣いにも心ここに在らずで返答する。しかし、アンの心が落ち着いた後、クロフト夫妻が二人で楽しそうに会話する姿が描写され、アンは二人の仲睦まじい関係性がどのようにして構築されてきたかを第三者の視点から思考する。ここでのアンは会話に参加せず、二人の様子を静かに観察してお

り、やはりここでも周囲と自分の間に一定の距離を置き、内面的な孤独を通して感情を鎮めようとする彼女の傾向が描かれているといえる。

四点目は、音楽会でのウェントワースとの会話の場面である。アンは彼との会話を終え、彼の態度や言葉から彼は自分のことを愛しているのだと確信した。心を狂わされたアンだが、演奏が始まるというので、ウェントワースがどこの席にいるのかあたりを見回しながら席につき、“She had feelings for the tender, spirits for the gay, attention for the scientific, and patience for the wearisome”(p. 217)と思う存分に音楽を楽しむ。そしてエリオット氏にイタリア語の歌詞の翻訳を頼まれ会話をするのだが、そこでアンが音楽会をどのような精神状態で楽しむことができたか、どれだけ幸せだったかを誰かに言うことは決してない。英文学者の Shaw(1975)は、アンが彼の愛を確信したのにも関わらず、すぐに彼に愛を伝えないのは、彼女が愛情を持っていることと愛情を宣言することの違いをよく認識しているからであると述べている。アンの推論の客観性の不十分さは本論文の前章でも説明しているが、アンはウェントワースの優しく温かい愛情が戻ったことを彼の態度から察するも、言葉にして確実に伝えられていないために、彼女の主観的な推論にすぎない可能性があることを自身でも認識し、即時に行動に移さないのであろう。ここでも、自分の高まった感情を誰にも明かさず、自身の内面だけで完結させる姿が描かれていると考えられる。

以上四点のアンの行動から、彼女の人物像を考察する。全てに共通するのは、アンが孤独を通して気持ちの高まりを抑えている点と自分の内面やウェントワースに関する自身の推測について誰にも明かしていない点である。これらを踏まえると、自分の内面を決して周りに明かさず、感情の高まりを自分ひとりの力で抑制するアンの人物像が描かれていると解釈できる。そして、この感情を抑止するというアンの特徴は、少なくともこの物語の八年前からアンが持っていた素質である。アンは当時、激しく愛していたウェントワースのプロポーズをラッセル夫人の説得に従い断った。それは“Lady Russell, whom she had always loved and relied on, could not, with such steadiness of opinion, and such tenderness of manner, be continually advising her in vain”(p. 54)とあるように、母親のように深く慕ってきたラッセル夫人の説得に対して、アンはどうしても逆らうことができなかったからである。直野(1986)が説明する通り、当時、娘の結婚に関して親の意思も考慮されるべきであるという考えが普及しており、アンは親に対する娘としての義務感からこうしたのである。実際にアンは“*When I yielded, I thought it was to duty*”(p. 284)と、説得を受け入れることが義務だったと認めている。このことから、アンは社会的体裁を保つために自らの感情や欲望をも抑制する人物であることがいえるだろう。

では、指摘した上述の四点においてアンが感情を抑制したのも、社会的体裁を保つためだったのだろうか。アンがウェントワースへの恋愛感情を露わにせず抑えようとしていたのは、もちろん最初の方はウェントワースが変わり果てたアンを見て誰か認識できなかったというメアリーからの伝言や、彼の冷たく形式ばった態度に深く傷つき、彼の愛情が消滅したことを悟ったためであろう。しかし、自分に対する彼の友情や優しさをアンが徐々に感じ

取るようになった後も、彼女の感情の抑制は続く。それは、マスグローヴ姉妹のどちらか、特にルイーザとウェントワースの結婚を、周りの人々が期待していたからであると考えられる。メアリーとチャールズがウェントワースにマスグローヴ姉妹のどちらかと結婚してほしいと議論する場面や、ルイーザの転倒事故が起きた際、クロフト提督が“a very bad business indeed. A new sort of way this, for a young fellow to be making love, by breaking mistress's head”(p. 146)とジョークを言い、ルイーザとウェントワースの恋人関係をほのめかすような発言をしたことなどから、ほとんどの登場人物がマスグローヴ姉妹のどちらかとウェントワースが結婚することを期待、または予想していたことが読み取れる。こうした状況でアンがウェントワースへの感情を露わにしたとすると、周囲の秩序が乱れることは予想できるだろう。そこで、アンはこうしたコミュニティ内の期待に反することを避けるために、自らの恋心を誰にも知られないように抑制したのではないだろうか。Shaw(1975)、直野(1986)が述べるように、アンは、周りに奉仕することを生き甲斐にしている。わがままなメアリーのお世話をしてあげることや、甥っ子が怪我をした際に自身が積極的に介護にあたったことからわかる通り、アンは、たとえ周りの人々が愚かだとしても、一生懸命役に立とうとしている。こうしたアンが無私の精神が、社会の期待や秩序を守れるようにと、自身の恋愛感情の抑制につながったのだといえる。

次に、アンが自身の感情を抑制する姿について、本論第1章で指摘した『説得』におけるフェミニズム的な主張との関連性を論じる。まず、第1章第1節で示したアンとベニック大佐の会話における彼女の発言と比較する。アンは悲しみに暮れたベニック大佐に向かって、感情に溺れすぎないように韻文は適度に楽しむべきだと助言をしている。強い感情に溺れることを男性に向かって否定するアンの姿勢は、高まる感情をなんとか抑制しようとする彼女の人物像と重なる。またこれは、男性に依存するための当時の不十分な女子教育を批判し、女性が理性や知性を養うことの必要性を説いたメアリー・ウルストンクラフトの主張にも重なる。こうした発言を男性に対して直接したことから、彼女が感情をコントロールするのは偶発的なものではなく彼女の信念に基づくものであり、その信念は当時のジェンダー規範に逆らう意識の表れであると思えることができるだろう。

第1章第1節では、アンの行動は先進的な女性としての一面はあるものの、当時のジェンダー規範を受け入れていた一般的な女性像とも重なるということを示した。一見アンは、当時の社会における男女間の不平等な慣習を受け入れているように読み取れる。しかしそれは、アンが柔軟に現実的な問題に対応する力を持っているからだと考えられる。池田(2021)は、作品内に登場する柔軟な精神を意味する“elasticity of mind”(p. 178)という語に着目し、アンは強い意志を持ちながらも柔軟に現実に対応する人物だと評価している。アンとハーヴィル大佐が男性と女性のどちらが長く愛情を持つことができるかという議論を繰り広げる場面では、アンは女性が愛する男性のことを簡単に忘れられないことを主張する。池田によれば、この言葉は、少し離れた場所にいるウェントワースに向けた間接的な告白であったという。当時の慣習では、女性が男性に気持ちを伝えることはタブー視されてい

たが、アンはどうしてもウェントワースの誤解を解くために自分の気持ちを伝えなければならなかったため、この方法を取ったのであるという。社会の期待に応え、堅実に行動するアンの振る舞いは、彼女の柔軟さに基づくものであり、女性としての弱さではなく、むしろ厳しい現実をすり抜けて生きるための強さだといえるだろう。よってアンの人物像が当時の一般的な女性像に重なる点は、当時のジェンダー規範を肯定するという意義を持つわけではない。

また、強い感情を持ちながらもそれを抑制するよう努めるというアンの人物像は、作者オースティンの結婚に関する倫理観とそれに伴うジェンダー観に重なる。オースティンが理想とした結婚は、現実的な条件を考慮しながらも女性個人の感情や意思を尊重しようとするものであった。アンは社会の秩序を守るために理性的に感情を抑制しつつも、最終的にはその激しい感情をエネルギーとし、自分の意思で幸せな結婚を掴み取っている。アンの人物像において、当時の女性に求められた義務を守るという現実的な方法で描かれ、かつ、女性自身の意思が重視される描写がされていると考えられる。

本論第1章第3節で示したアンが本作品における発言の中で社会的・教育的差別を主張しているという点は、彼女の感情を抑制する人物像に反映されていると考えられる。まず、男女間の社会的差別を認識している点は、上述の通り、彼女が女性として社会や家庭の秩序を守ろうとして、ウェントワースのプロポーズを断ったことや、感情を表に出さないようにしていることに影響している。また、教育的差別について認識している点について、理性を以ってして感情を抑制しようとするアンの人物像と重なっている。これは、女子教育の不足により女性を感情的、受動的な存在にしまうと批判したウルストンクラフトが提案した新しい女性像と一致している。

本章では、まず、アンの冷静な一面が描かれている場面について分析をし、彼女は周りとの関わりの中でその冷静な判断力を発揮することを指摘した。しかし、その冷静さは、ウェントワースの存在を条件に失われ、激しい感情を抱いたり、身勝手な推論をしているかのような描写がされたりしていることも確認した。そして、冷静さと感情の高まりが共存するアンの人物像を分析し、彼女は、激しい感情を内に秘めながらも、それをコントロールして露呈させない能力を持っており、それは、『説得』において主張されていると考えられる、女性蔑視的な厳しい現実社会に対して柔軟に対応するフェミニズム的な視点を体現するアンの性質であることを確認した。

終章

ジェイン・オースティンの『説得』(1818)の主人公アンは、控えめで落ち着いた女性である。この小説が書かれたのは、社会的・教育的な不平等が女性に押し付けられていた時代であり、本作品にもあらゆるフェミニズム的な主張がアンの発言から確認されている。本論文では、アンの人物像と、作品に含まれるフェミニズム的主張との関係性を見出し、作品に込められた新しい女性像を明らかにすることを主題とした。また、アンの人物像において、冷静であるのか感情的であるのか曖昧な部分が見受けられる。本論文では、こうしたアンの二面性に着目し、先行研究では指摘されなかった彼女の人物像における新たな側面を探ることを目的とした。研究方法としては、まず、当時の男女不平等と当作品に込められるフェミニズム的主張に関する先行研究を扱い、批判的に検討した。そして、アンの思考や発言がどのように抽出され、彼女の人物像がどのように変化しているかを、話法の分析を通じてテキストを解釈した。

第1章では、『説得』をフェミニズムの観点から分析するために、アンの人物像の分析や作品に含まれるフェミニズム的な要素を整理した。まず、『説得』が書かれた時代の女性たちについての先行研究を整理し、当時の社会的・教育的男女不平等を確認した。そして、当時の女性たちに求められた性質、当時のフェミニストが主張した新しい女性像を、アンの行動や振る舞いとそれぞれ比較し、彼女が男性に依存する当時の女性の慣習に従いながらも、女性運動家の考えと部分的に一致することを明らかにした。次に、作者ジェイン・オースティンの書簡の分析をもとに、彼女の結婚に関する倫理観を確認した。彼女は一貫して愛情のある結婚を第一とし、同時に相手の経済的条件も考慮することの必要性を主張しており、女性個人の恋愛感情と現実的な条件を並行して見つめていたことを確認した。最後に、作品内でフェミニズム的な解釈が可能な箇所を整理した。アンは社会的・教育的な女性の不平等を自身の発言により主張していることが明らかになった。

第2章では、話法の観点からアンの思考と発言がどのように描写されているかを分析した。まず、作品冒頭では、他の登場人物と比較してアンの発言が直接話法で描写されることが圧倒的に少なく、アンは控えめで影の薄い人物であるという印象が与えられていた。そして作品中盤部分では、徐々に直接話法で描かれるアンの発言が多くなり、彼女の理性的で柔らかな主張と冷静な判断力が描かれるのと同時に、彼女の感情の高まりが自由間接話法で描かれることによって、彼女の非理性的な側面も描写されており、アンの人物像の二面性が明らかになった。最後に、作品終盤部分について分析した。ここでは、アンがウェントワースの勘違いを解き、彼に間接的に告白する姿が描写される。中盤部分に続きアンの感情的な一面は描かれるものの、その個人的な感情をエネルギーとし、自ら柔軟に行動する姿から、彼女の自主性が見られた。

第3章では、前章の話法の分析を踏まえて、彼女の人物像の二面性を分析した。まず、冷静さについて、彼女は周りとの関わりの中で冷静な判断力を発揮していることが明らかになった。しかし、ウェントワースに関する推論においては、その推論の正誤を判断する客観

的な情報が小説の語りによって排除され、彼女が非理性的な判断をしているような描写があることから、アンの冷静さは完全なものではないということが確認された。アンの感情的な一面については、彼女が感情を激しく揺さぶる場面は全てウェントワースの存在を条件にしていることを指摘した。作者のオースティンは、第 1 章第 2 節でも確認した通り、結婚において愛情を第一条件としており、そのロマンスを重要視する立場から恋愛感情を事細かく描写することに価値を置いたという解釈を示した。最後に、アンは自身の激しい恋愛感情をどのように処理しているかを考察した。彼女は孤独を得ることにより周りの人々にその感情の高まりを見せないように努力しており、それは、コミュニティの秩序を守るという点で、周りの人たちとの協調を図るという当時の女性に求められた期待によるものであることを確認した。しかし、彼女は単純に当時の慣習に従っていたのではなく、その社会的な不平等を正確に認識しながら、柔軟に対応しているからこそその行動であることを指摘した。

結論として、女性個人の意思を結婚において尊重しようとする点、社会的・教育的な不平等を認識しながらも堅実に行動する点、理性を備えている点などから、アンが強い感情を抑制する姿は、『説得』においてジェイン・オースティンが提起した、18 世紀から 19 世紀の社会における新しい女性像だといえる。

本稿では、『説得』の主人公アンの人物像を話法の観点から分析し、作品に含まれるフェミニズム的主張との関わりを示した。その結論として、この作品に描かれる新しい女性像として、アンの感情をコントロールする姿が描かれ、それは当時の男女不平等の慣習に対応しながらも、自らの幸福を得るために自主的に行動する柔軟な女性のあるべき姿として描かれたことを指摘した。先行研究では指摘されていなかったアンの人物像の二面性の前向きな側面に着目し、『説得』に含まれる新たなフェミニズム的解釈を示すことができた点が本稿の意義といえるだろう。

参考文献一覧

- Austen, Jane. *Persuasion*. Flame Tree Publishing Ltd, 2019.
- Brown, Lloyd. "Jane Austen and the Feminist Tradition." *Nineteenth-Century Fiction*, Vol. 28, No. 3, 1973, pp. 321-38.
- Magee, William H. "Instrument of Growth: The Courtship and Marriage Plot in Jane Austen's Novels." *The Journal of Narrative Technique*, Vol. 17, No. 2, 1987, pp. 198-208.
- Page, Norman. "Categories of Speech in *Persuasion*." *The Modern Language Review*, Vol. 64, No. 4, 1969, pp. 734-41.
- Shaw, Valerie. "Jane Austen's Subdued Heroines." *Nineteenth-Century Fiction*, Vol. 30, No. 3, 1975, pp. 281-303.
- Walzer, Arthur. "Rhetoric and Gender in Jane Austen's *Persuasion*." *College English*, Vol. 57, No. 6, 1995, pp. 688-707.
- 池田裕子「しなやかな知性：ジェイン・オースティンの『説得』を中心に」『熊本大学英語英文学科紀要』63-64巻, 2021, pp. 65-79.
- ウィリアムズ, メリン『女性たちのイギリス小説』鮎澤乗光, 原公章, 大平栄子訳, 南雲堂, 2005.
- ウルストンクラフト, メアリー『女性の権利の擁護 政治および道德問題の批判をこめて』白井堯子訳, 未来社, 1980.
- オースティン, ジェイン『ジェイン・オースティンの手紙』新井潤美訳, 岩波文庫, 2004.
- 門田守「アン・エリオットは本当に説得されたのか? —ジェイン・オースティンの『説得』におけるヒロインの心理的自立の獲得について—」『奈良教育大学紀要』64巻, 1号, 2015, pp. 161-76.
- 川口能久「『説得』におけるジェイン・オースティンの曖昧さ」*Osaka Literary Review*, 35巻, 大阪大学, 1997, pp. 93-105.
- 橘高眞一郎「英語文学作品における自由間接話法の心的処理」『佛教大学 文学部論集』101号, 2017, pp. 65-86.
- 島崎はつよ『ジェイン・オースティンの語りの技法を読み解く』開文社出版, 2008.
- ジュネット, ジェラルド『物語のディスクール：方法論の試み』花輪光, 和泉涼一訳, 星雲社, 1985.
- 直野裕子『ジェイン・オースティンの小説—女主人公をめぐる—』開分社, 1986.
- 永嶋大典「ジェイン・オースティンの倫理」『英文学研究』35巻, 日本英文学会, 1959, pp. 279-92.
- 久守和子『イギリス小説のヒロインたち』ミネルヴァ書房, 1998.
- 廣野由美子『深読みジェイン・オースティン 恋愛心理を解剖する』NHK出版, 2017.
- ブラウン馬本鈴子「ジェーン・オースティン『説得』(1818) 試論：自己への説得」『西南女

学院大学紀要』15 卷, 2011, pp. 117-26.

松本啓『ジェイン・オースティンの世界』近代文藝社, 2011.

リーチ, ジェフリー・N, マイケル・H. ショート『小説の文体：英米小説への言語学的アプローチ』石川慎一郎, 瀬良晴子, 廣野由美子訳, 研究社, 2003.